

コンサルタンツ北海道 100号までの歩み



100号を迎えて

～北海道支部・北海道技術士センターのあゆみ～

(社)日本技術士会 北海道支部 副支部長
技術士（総合技術監理部門、建設部門）

齋 藤 有 司

36年2カ月の歳月を経て、とうとう100号、記念号発刊の運びとなりました。この間、創刊号を発刊した昭和42年に125名だった技術士試験合格者も平成14年度には累計で2,614名となり、現在383名が(社)日本技術士会会員、1,661名がセンター会員となっております。

会誌コンサルタンツ北海道は、北海道の技術士活動の歴史そのものを記録してまいりました。たまたま会誌が誕生した昭和42年は、私が当時の北海道開発コンサルタント(株)に入社した年でした。当時は昭和47年に札幌で開催を予定しておりました冬季オリンピックに向けて社会資本の整備、とりわけ道路の整備に全力を傾けていた時と覚えております。今、考えると高度成長の真つ只中、その頃産声を上げていたコンサルタンツ北海道を作るために先輩諸兄が忙しい時間を割いておられた姿とご努力を想うと、ただ、ただ頭の下がる思いがします。

先日、総会の講演を日本技術士会の副会長で広報委員長でもある安藤技術士より行っていただきました折、コンサルタンツ北海道をご覧になった感想について、「本部が会員に発行しております雑誌『技術士』の改定作業に大いに参考にさせていただきます。」との、お褒めの言葉をいただきました。前日も安藤副会長さんからは、広報のあり方について大島支部長と一緒に議論させていただき、今後の会誌作りに大変参考になるご意見をいただきました。とくに、技術士全員を対象としております継続教育(CPD)の情報の伝達手段として、支部・センターが

共同で発行していることのメリットが遺憾なく発揮されていると認識していただき大変嬉しく感じました。

100号発刊に当たって、コンサルタンツ北海道を1号から目を通して見ました。会誌が、支部・センターの歴史を実に良く現していることを強く感じました。そこで、その歴史を振り返り大きな括りとして下記のように分けてみました。

幼 児 期 (昭和41年～昭和51年)

北海道支部・センターの誕生から、組織作りや財政など支部としての基盤を作った時代。

幼 年 期 (昭和52年～昭和61年)

第4回技術士全国大会の開催から支部・センター20周年記念大会まで、高度成長の問題点が浮き彫りとなり、環境問題など技術士にとってもさまざまな問題に直面した時代。

少 年 期 (昭和62年～平成7年)

第14回技術士全国大会の開催から第22回技術士全国大会まで。バブルがはじけ、新しい価値観の創造が求められた。技術士集団としての全道的な活動の広がりを造った時代。

青 年 期 (平成8年～平成15年)

支部・センターの事業分担が明確となり各委員

会・研究会の活動が本格的な広がりを見せ、技術士自身の倫理観が求められるようになった時代。

こうして会報の歴史を振り返りますと、全国大会を一つの区切りとして大きくステップアップしてきたことがわかります。青木前支部長は北海道支部で開催した全ての全国大会を経験されておりますが、「北海道支部はいつも新しい試みを実践してきたよ。」と言われます。私も平成6年第21回大阪大会から参加し、翌年の第22回札幌大会(後楽園ホテル)を経験しましたが、大会運営、研修旅行などにおいて、これまでとは一味違う特色を出していたと思います。

次ページに掲載したのは、昭和42年4月に北海道技術士センターの「会報 No.1」として発行された第一号の表紙です。当時の石山会長が、技術士に課せられた使命として、「北海道の技術開拓の支柱をしつかりと立て、肉付けしていくことである」と述べられていることは、現在も生き続ける言葉として注目に値します。また、「高遠の目標に向かって手を握り合って進みましょう」という初心を会員に呼びかけています。洋紙のサイズはB5版でカリバン印刷でした。なお、「会報」が「コンサルタンツ北海道」となったのは昭和44年11月からでした。

さらに、引き続き、「コンサルタンツ北海道」の編集にご尽力いただいた元編集委員長の菱川幸雄技術士と内田辰英技術士に当時の思い出や苦労話をお聞かせいただきました。菱川技術士には、会誌の編集作業も始めの14年間は、故水島技術士が会誌編集をほとんど一人で成されたこと、それから3人に、そして5人へとその輪を広げていったことなど初期の編集作業について、また、内田技術士からは名簿作成の苦労話など貴重な経験談をお聞かせいただくことができました。

また、[参考資料]として、支部・センターの歴代

の役員名簿並びに北海道支部の設立前夜からの年表を社会の出来事とともにまとめ「100号までの足跡」として掲載いたしました。

さて、支部・センターは今後どのような方向で発展していくのでしょうか？

次の10年は順に考えると壮年期ということになりますが、平成16年には札幌市で第31回技術士全国大会が開催されます。私はこれまでの大会のイメージを一新する大会になるのではないかと考えております。テーマは今後検討していくことになっておりますが、昨今の状況から ①技術士の社会貢献 ②技術士の倫理 ③技術士の社会的地位の向上 等がテーマの背景としてあがってくるでしょう。この大会は、道内技術士が社会的活動を通して、育んできたこれまでの蓄積を遺憾なく発揮し、全国にさまざまな成果を発信していく格好の舞台になると思っております。

これからの支部・センターの関係については、互いの役割を認識し分担し合って行けば、これまでの北海道方式が一番良いのではないかと考えます。ただし、将来に向けて、技術士の社会的地位向上のためにも大幅な支部会員の増強が必要なことはもちろんのことです。

平成18年には支部・センター創立40周年を迎えます。厳しい社会経済状況の真っ只中にある北海道に一筋の光を当てるべく、今後、我々技術士の活動は、倫理観に裏打ちされた社会的な貢献をその目的とし、継続教育を通して地方協議会の活動を強化するとともに、輝かしい壮年期となるよう、200号へ向け共に出発のテーブルを切りましょう。

[参考資料]

- 北海道支部・北海道技術士センター歴代役員名簿
- 年表「100号までの足跡」